

総括の基準と獲得すべき

目標

全国の同志諸君、八回大会に結集した全国の代議員諸君、われわれは、21斗争を防衛斗争を頂点とする全国各地の安保斗争として斗いた。首都における中央権力斗争を主軸に展開された全国の斗争は、わが同盟が回大会で確立した政治路線とその後諸実践を、山まゝて提起した同盟の総路線をかけた斗いであつた。そして同時に、同盟の総路線をかけた斗いであつたればこそ、10・21斗争は昨年、10・8・11・12斗争が切開いた新たな階級政治の局面を更に突破し、高次の地平を切り開く斗いとなり、六八年日本階級斗争の頂点を越え、兵に七〇年安保斗争前段の最大限斗争としての位置を占めるに至つたのである。

全国の代議員諸君、10・21斗争は3・31ベトナム和平提案以降の国内反戦斗争の停滞局面にあって、この局面を巨口帝制主義打倒、安保・NATO打倒斗争へ転換される国内階級斗争の任を課すものであつた。即ち八月国内反戦集会で獲得された成果を確実に国内的な現実的斗いとするものであつた。このような国内的諸任を果した10・8・11・12斗争は、六九年階級斗争への転換点となり、権力と階級総体の攻防を、権力と三派の尖端的攻防を軸に大きく転換させるものとなつた。

全国の代議員諸君、われわれは今、国内的国内的政治課題の中心環に迫り、国家権力の暴力装置との直接的衝突を通して全社会的階級政治の焦点を形成するに至つた。昨年、10・8・11・12斗争以降、権力と社会との距離を縮めた階級の関係にかつて、われわれが日本階級の尖端におどり出たからである。

しかし、ひとたび日本階級斗争の先端に、わが同盟を先頭とする革命的諸党派が立つや否や、権力の暴力装置はその攻撃をわが同盟を中心とする革命的左翼に集中し、革命的諸派はまさに前衛としての党的位置を占められ、前衛党としての党的指揮力と党的組織力を強固にうち固めつつ進んだのである。

全国の代議員諸君、われわれは、階級政治の先端におどり出た段階で開かれた諸任務に応へつつ、党的指揮力を強化して前進したが、そのことは、三月七回大会で獲得された政治路線と党形成・階級形成を、階級総体に深い影響を与へつつ実践する過程でもあつた。一方、この間の国際階級斗争は、北米・△国際反戦斗争の転換点にあつて、フランス五月

西独非常事態法粉碎斗争、米黒人暴動等に見られる如く、その斗争性格の比重を大きく変へて、先進階級斗争へと移しつつ転換して、こののである。

この転換は、後述の階級斗争を頂点とする北米・△階級斗争と北米・△勝利をめぐる展開された国際反戦斗争を接点としてきた国際的な革命的戦闘組織に、あらたな党的な転換を迫る情勢としてあつた。

このような国際階級斗争の性格の転換をもたうしたものは、いふまでもなく、現代帝国主義の経済危機の深化にともなう世界的侵略的圧迫革命政策の転換である。この国際的現代帝国主義の危機は、没落・停滞帝国主義の階級基盤を鋭く露し、同時に有機的市場連綿性をもつ膨脹帝国主義のブルジョアジーとその権力をもたぬ中心部を叩きこむのである。IMF機構の中心に勃興帝国主義の伸長を促しながら、没落帝国主義の脱離の底支をなし、同質化した産業構造が妨げる資本主義総体の矛盾の爆発を陰に謀り、現代帝国主義の緊密化し、潜在化した危機は、一國の階級危機を国際的階級危機に普遍化する性格を与へている。

すなわち、諸列強の一國における政府危機と政治危機は一國の階級政治を通じた決着へと帰結することなく、直接国内的な政治危機へと諸列強の政府を巻き込み、同時に帝制主義の経済基盤を瓦解させるのである。

このような現代帝制主義の危機の性格と発現形態は、当然、政治危機の国内的転化にとどまらず、内乱に国内的性格をあたえるものとならざるを得ない。諸列強の権力に侵略反革命戦略の再編を促さつた危機とはこのよつなものである。

このことは、帝制主義諸列強の権力の性格とのものにも転換を迫り、ニクソン体制、キーンガー政府の實的転換、ドゴール新体制、イタリア政府危機、佐藤三選となつて結果したし、同時にアメリカリアの階級斗争にもあらたな対応を迫つた。こうして国内的階級斗争は六八年を通じて六九年へと大きなつねりを形成せんとしている。だが、迫り来る巨大な国内的階級斗争の波に対応し、このつねりの波頭を立てて指揮しうる前衛政治は、未だ国内的に未形成な段階にあり、西独のSDS、フランス、イタリア等、西歐の革命的諸派はもとより、とりわけ日本階級斗争と直接的関連をもちつたころの米SDSとSNCC、ブラックパンサーは前衛的党派への転換過程にあつて流動をつづけて



全学連大公会はわが同盟の政治組織指導上の弱点を全面的にあらわし出した。それは全学連大公会における獲得目標の不明確さを反映したものである。それ以上政治組織指導上の問題を突きつけた。

革命的左翼党派の国内統一戦線をめざす統一行動を構みあはる組織戦略は、6、15集会をめぐって統一戦線問題として思ふもつきつづけられていた。だが6、15集会後、わが同盟の国内統一戦線戦略組織戦術確定への転機を以て、左位置を以てして一定の浪迷を以らみつつも、単独党派の結束力の確立を目標として貫徹された。

政治組織路線上の浪迷を以らみつつも、組織若果刀として成功をせよとめたる。15集会後、社員との關係を媒介とした中核派対青解・革マル連合という、諸党派の野合の破壊との相対的位置において、結果論的には政治的優位の地歩を確立した。だが諸階級・諸党派關係と政治路線の両面性との関連に於いて把握する実践的方針の未確定段階に於いて、革マルの党派衝突戦術に陥る弱点を以て残すべきを得なかつた。

(三) 全学連大公会をめぐる政治路線上の指導と組織指導上の問題は、八月国際反戦集会への実践的対応を通じて克服の方向性が追求され、政治路線上の問題としては、いわゆる「8・3論文」として政治局論文(中央委決定を経て)提出された。

8・3政治局論文は①帝國主義階級の不均等発展と侵略、②「労働者国家」と帝國主義階級との対立と反革命、③の關係を、帝國主義階級の弱み環を「侵略」と反革命の不在一柱として押さつて、④階級階級反革命同盟に決定する攻撃型階級斗争と⑤階級一戦線と世界革命戦争と世界赤軍の創設として定式化した。

8・3政治局論文の成果は、④階級階級階級の性格と形態を、古典的帝國主義戦争及び体制階級争のいずれにも限定することなく、「世界革命戦争」として規定したことにある。帝國主義の侵略反革命と赤軍・NATOとの対決を世界革命戦争へ転化するという④階級階級階級の規定は、七回大会路線の一步前進である。

だが、世界革命戦争と④階級階級階級の世界赤軍創設への実践的アプローチが、現代帝國主義の形勢論をめぐって、これと無関係的に提出された。また④階級階級階級の性格をめぐって、主として「攻撃型階級斗争」論のみを媒介として提出されたため、労働帝國主義と没落帝國主義の外的階級と内五階級との斗争形態が不明確なまま、革命の

客観的条件を抜きにした追いつきの革命論となり、同盟の階級形成・党形成が欠落した。

(四) 過渡期世界論に關する内容規定については、現代世界の基本的法則を貫くものは、帝國主義の不均等発展の法則であり、現業の階級斗争を規定しているものも「労働者国家」をも含んだ帝國主義の法則であることを提議すべきである。現代帝國主義の世界階級の諸矛盾は、帝國主義の法則が現代的に変容したものであるが、法則の変容は帝國主義の内的論理の突進段階に規定された法則の現形形態の変容である。従って労働者国家の成立・併存が帝國主義の法則を変えたとは判断することは誤りである。現代帝國主義はみずから内的発展の史的段階に際して世界的矛盾の現形形態と構造を変え、その現形形態に對する「労働者国家」の存在という恣意的対応策等が「労働者国家」の存在という至清外理因に制約され、その上部構造として反革命同盟を成立しているのである。

共産主義同盟は創設以来、一連の階級斗争の根拠地ではなく、むしろ世界革命の標榜となつていくという立場を貫いてきたが、われわれはこの立場を堅持し、「労働者国家」を根拠地に考えざるべきでない。われわれは「労働者国家」を二面性においてとらえ、その指導部の世界革命戦略と「労働者国家」の人民の指導性において具體的にこの「国家」の存在が起因となつて「階級斗争」は登場し、三ノロックの「階級斗争」に迫り始められた帝國主義諸列強は国際反革命同盟に懸念して防衛しているもので、この弱み環を攻撃型階級斗争でおせば、世界革命戦争になるという考えは誤つてゐる。だが「階級斗争」は中ソに對する「階級斗争」としてのみとらえることはベトナム解放斗争、就中フランス五月を戦線とする。「階級斗争」の再編と性格の変化を見出すべきである。

「階級斗争」同盟は、戦前「階級斗争」の敗北を以て明らかになつた結果で、中ソから再建「階級斗争」場を創設する目的で米帝を軸に形成されたが、不均等発展と後進「解放斗争」はその性格を変え、就中ベトナム解放斗争は安徐の性格を對後進「反革命」と変え、フランス五月はNATOの性格の比重を對面ローパ「反革命」に移し、日帝と獨帝の「階級斗争」の性格を変え、長きに亘る「階級斗争」の性格を現代帝國主義の「階級斗争」の現形形態に創設したものであり、これはあくまで一連の「階級斗争」の性格を以てしたものである。

そのことは同時に①現代帝國主義の不均等発展が

一次大戦後の如く、米帝とヨーロッパおよび日帝との

格差の拡大としての不均衡としてではなく、戦後米帝の全一支配を崩して大陸ヨーロッパ、ななんすく西独と日帝を平等化して迫り、各諸列強の生産過程を超重化学工業において同質化してゆく不均衡としてあること、②矛盾の外化と対立は、M.F.体制の

枠内統一市場分断の防衛の枠内で追求せざるを得ず、枠内での侵略は被侵略中の革命に直衝し、さらに「労働者の根拠地回家」との戦争、およびソ連圏との対立をはらむため、没落帝國主義は侵略反革命を挫折させるため内任化し抑圧を強化して対決せざるをえず、階級対立を激化させ、帝國主義の主体の力量によって革命へ転化する③侵略と抑圧の

破壊は世界統一市場を分断させ世界革命への契機をつくり出さうとする可能性を現実的に示し④更に、現在の侵略抑圧反革命に対決する闘いな、米帝を除いて未だ現実に本口の外で侵略反革命戦争を開始する以前に、統一市場の分断を迫りつつも未だ全面的破壊に至らぬ以前に大衆的高揚を帝國主義の内圧と権力の再編に対する大衆の社会的不満の爆発としてあり、なつ研成政の指し示から離れて革命的左翼の勢力増進と結合しつうあることを示しているのである。

①更に、五中委総括討論をふまえ八月國際反戦会議の総括を深めぬばならない。七回大公路線の基本方針の一つとして國際部は八月國際反戦集會を勝ちとり、國際10月行動を決定した。この決定によって我々は10、21斗争を闘い抜き、国内諸党派を國際主義の下にせり圧してきた。左同盟の主体的総括は、共產主義12号總括論文の序説を指し示している諸問題、即ち、八月國際反戦會議、國際的党派論争の開始となったことをあきらめ外にした。ゆればは國際反戦會議において、10月統一行動の方針を勝ち取りながら、國際的党派の協議機関を五インターを目標とするものとして確立しえなむという壁に突きあたった。この壁とは、①國際反戦統一行動段階の問題と

世界党を目指す前進黨の國際的協議機関の問題とその性格において、次元を異にした問題であり、ストレートには結合しえなむ壁であった。またそのことは、②ミンロンクの階級斗争の担い手を確固たる党として自己を形成しえなむこと、に規定されてあり③したかつて、3月以後の國際階級動向の深化に対応して國際的カ三潮流諸派をすでに八月時裏において分野再編を迫られあり、大衆的政治同盟友ら文字どおり世界革命戦略を確定した前進黨への脱

皮を待たざるを問題としてあった。

このことが引出される結論は、ゆればのウインター結成への目標は何ら変更するものではないことを確認した上で、その実現過程の政治的

ロケラムとしては、①さわめて現実的に國際諸派の分折を、諸党派がおかれた階級斗争と関連にありてなしとげ、②現実実践への方針提起を通して、前進黨への経路への作業を促進させるべく援助することによって指導性を発揮しなればならない

ということである。①かゝる態括にもとずき、八回大会はあらたに綱領委員会を発足させ、その確定に全力をそそがねばならない。②そしてそのことは、國際統一行動を國際階級危機に對決して前進させる方針を提起するとともに、弊障な在外同盟支部を当初は留學生を中心に解放しつゝ定着化させ、政治的、組織的な物的拠点を諸外に固定化させることを通して國際的諸派の革命的前進への転換を促進させ、ゆが同盟路線への結果を恒時的に保証する体制を開始しなればならない。

③ゆれば以上の路線上の総括を通し、四中委と五中委の討説を更に発展せしめ、路線の相違にまで総括を押しすすめて切開し、全同盟の意志一致を確保しなればならない。

そのためには「労働者回家」との前進を包含め、たところの現段階の階級危機に對する帝國主義の権力の性格規定を行い、同時にそこから規定される國際階級斗争の普遍的性格を見抜き、その両面から要請される同盟の前進黨としての指導性を獲得する方法論的基準を確定しなればならない。この任務に應ずるためには、政治路線上の総括にとどまらず、政治指導上の総括にまで総括を深めなければならぬ。

その性格において、次元を異にした問題であり、ストレートには結合しえなむ壁であった。またそのことは、②ミンロンクの階級斗争の担い手を確固たる党として自己を形成しえなむこと、に規定されてあり③したかつて、3月以後の國際階級動向の深化に対応して國際的カ三潮流諸派をすでに八月時裏において分野再編を迫られあり、大衆的政治同盟友ら文字どおり世界革命戦略を確定した前進黨への脱

政治組織指導上の総括

(一) 路線上の総括とともに欠かさないものが政治組織指導上の総括である。もし一切の諸実践の結果を政治路線に還元してしまつたらば、「あれを見落して来た、これに気づかなかつた」といつ、いづれ「見落し総括」となり、またもや新たな路線をつくりあげて突進するといふ結果になる。なほこのよつな路線上の欠陥や不充性を発生したのかという問題を政治党派は自己責し、政治党派にとつての理論とは何かという問題を政治党派の組織指導の問題としてのみみつゝさなければならぬ。即ち階級斗争に政治党派を實踐にかゝりゆるにあつた、かゝすことのできない方法論上の基準を確定することである。

(二) われわれが七回大会以降、戦略の實踐方針化の過程で見落して来た方法論は、いづゆる政治路線に運動論を結合する際、「階級関係論」から権力斗争と組織戦術を展望する視座である。階級関係論の捨象は客観的至者危機論と共に「至清主義」の両翼として捨て去られてしまつたのである。

その過程はマル戦派との党内斗争の過程に発生したものである。政治党派の限界としてやむをざる一面をもちつつ、その「階級」の路線の限界性一党派斗争に媒介された党派斗争の武器として、その「階級」の限界性一指導部がその後の政治組織指導上において、これをいかに深刻に理解したかに問題が存在する。われわれは実践的党派として、党派斗争を通して路線を確定しなげばならぬ状況にある。したがつてマル戦派若田理論粉碎の過程で、若田の①「至清決定論」と②「フン諸リ帝口主××」の党内斗争要論③「フランス的國家論と政治力学的階級配置論」④「逆手突上げ入党組織論」を粉碎した。そしてこの粉碎のためのアンチとして①過渡期世界論②レーニン帝口主××論にまごづく膨張主義外交との対決論③三ノロック階級斗争の結合と国際主義④党の理論上からの中央集権的取革型論、を対置させた。この体系的論戦は全党機関をキミ（む）となく組織対立にエスカレートし組織決着が大会で進行した。マル戦が中央機関を占有（それは我々の弱さの表現）していたため、正規の全党機関をキミ（む）と争つたため、正規の全党機関をキミ（む）と争つたため、彼らの迷いで分裂に至つた。

したがつて若田の体系を完全に止揚しなさいませ、
①客観的危機論の切り捨て、②階級配置論の切り捨て、③社民介入論の否定から統一戦線関係、諸党派

との斗争と統一戦線の不充性と単独党派の戦略的位置づけによる単独斗争としての一面化が進行した。

(三) それは統一フロント以来の指導部の理論上の無政府と組織に対する無責任性の反動として、はじめて全党を一つの理論体系にまとめんとする積極的な一面でもあつた。そしてマル戦との合併後にあつて中央機関を握られた根源は統一フロントが問題意識の空庫としてのみずみずしさもちながらも責任ある指導部を形成しえなかつたことであつた。その反動としての理論の体系性への志向が積極性をもつた。若田理論の粉碎の「打倒の理論」として一面化した。

しかしして、客観的危機論の軽視は、革命の客観的条件としての現代帝口主××の具体的な実体分析の軽視をまねき、古典的公式で現象を切る規定運動的傾向を発生させ、生々しい現実の中に法則の発現を隠すことをやめた。権力論を階級配置と同一視する政治力学主義の否定は、革命主体一統中前党派が目的意識的に切り開く階級斗争のタイナミズムを形成しえたが、しかし他方では党派の細鎖一戦略をストリートに一党派の部隊力をもちて展開する斗争と統一戦線形成との関連を混同され、他党派に対しても直接路線の承認を全面的に要求する傾向を生んだ。

これは中核派の三派至清連におけるピクトのアンチとして強められる性格をまっていたが反帝生学連大会への我々の対応にそれが返返つてきた。階級配置論の否定は、突出し激突する階級先端の攻防としての位置が明確とならず同盟が大家から肉ばなれする危険性をまもっていた。われわれは政治力学主義的配置論や固定の客観主義的配置論は粉碎せねばならぬが革命のホーの条件一主体的党の斗いと階級攻防を既成諸党派の動向が反映している階級総体の中に位置づけ、新左翼運動の日本階級斗争に占める現在の位置と同盟の位置を主体的力量との関連においてとらえておかねばならない。

細鎖的次石の方針を大家斗争の扇動の方針とする（この等の組織指導上の問題も「階級関係論」の欠如からくるものである。いづゆる政治路線に運動論を根ざせ結合させる環が階級関係論であり、この再構築なくしては、再び戦路の無媒介的戦術化、戦路論なき大家運動からの反権力意識の形成が分断して進行するであらう。

④の前進を固執貫徹に設定し切り開く国家権力との階級闘争の攻めを主軸に総体把握のべきであるが

権力と三派の關係の面では未だ階級闘争の総体ではなく、この先端の段階は、階級の上皮から始まる自然発生的な大衆闘争としての關係に於て、更に階級の

深部で階級闘争を知る大衆意識との結合との關係に於て、相対的独自に定まらざるものである。④これ

らの諸關係は、当然、同盟組織—大衆的政治同盟的

的大衆運動家—大衆行動組織の主体的有機的組織

の中心である。⑤更に国家権力と前征を組織する

先端の攻めを主軸とする階級闘争は、諸階級諸階

級の意識の分解と斗争の前進に規制される諸階級階

級に照応する。即ち統一戦線政治として実践的に反

映する。

△階級関係論—「権力斗争を主軸とした諸階級・諸

階級の動向と統一戦線は、革命の唯一条件—主体的

心算の組織する戦力—が基礎とする階級闘争を、既

成階級級の動向を反映している階級闘争の中心位置

を占め、新左翼運動の日本階級斗争に占める現在の位

置と同盟の位置と主体的同盟組織力関連に於てどう

して行く必要がある。

統一戦線問題が階級の政治課題となる段階は、その

政治的進歩が階級社会の基本階級—ロレタリア—

下に依拠して現定した社会勢力として登場しつつも、

その中心ロレタリア階級と諸階級を包摂しえない

段階に於いては、権力斗争に迫る組織的攻めである。我々の

日本階級斗争に於ける位置は、あつたかには国家権

力との攻めを以て先鋒の切り開く前征の階級として

政治的進歩と社会闘争の中心として—大衆社会階級

をも含めて新左翼諸派の依拠する層は、その発生源

は全階級として定まらざるに制約されて、いまだ基本

はロレタリア—トを市民の制圧なら解さぬって大衆

関係の面で一切の階級斗争を切り捨ててはならない限

性を意識して行かなければならない。70年に至る政

治関係が煮詰る段階では階級斗争を扶け同盟及び新

左翼にも包摂しえなれどこの方針ならず、社共も包

摂しえない広範な部分からも登場し、階級斗争総体

が深く広がりをもつて展開するであろうし、10・21

斗争の局面はこの事を端的に指し示している。就

中、同盟の前征党への確立を目指す五中委は、又ロ

レタリア本隊への同盟組織建設、処置をどう処置反

組織化の裏面において「階級関係論」を、権力論、

階級論、階級関係論、運動論、党組織論として

一貫した体系として組み込まなければならぬ。

この一貫した体系の实践的組織攻めとして、階級斗

争総体の主体的階級関係の組織攻めとして統一戦線

政治は確立しなければならぬ。

⑥六月、六月全労連大会の終結を以て、下

部の統一戦線として安保粉砕闘争を提起して来た

この積極的組織攻めは、10・21斗争の攻めをめぐ

る情勢で、10・21以降分解した三派および小諸派を

別進合衆へと併せ出すに致して重大な役割を以てす

に至った。だが10・21斗争を契機に局面はあつた

段階に突入し、11・22東大—日大斗争は、あつた

に依り及んで既成した安保粉砕闘争も反帝統一戦線の

意義を以てするようになった。日共のあつた人民戦

線方式による反動的登場と社会党、総評の反旗、全

党連非論決定は、中階級市民の登場と共に、現局面

の階級関係の深まりを以て象徴している。以て

いさ統一戦線政治が階級関係の一貫に位置付けら

(2)では既段階を規定しているものは何か。

そのキーはバトナム解放斗争の和平への転換にともなう日米反バトナム反戦斗争の停戦であり、キーは米帝のバトナムでの軍事の敗北と不均等発展下農村の深化にともなう米帝の国際経済政策及び世界反革命軍戦争段階の転換、二水軸に回転する諸列強の侵略反革命の転換である。キーは日米階級斗争、就中アメリカの階級斗争が日米帝国主義諸列強の兵力の再編と国内統治機構の全面的再編に對し、あらたなうねりをもって転換しつつ高揚を始めてつあることである。そして次に、これらの敵の転換に對して世界階級斗争を展開して主体的情勢を切り開くべき前紅指導が混乱と再編に直面していることである。最後に、この転換を計る主体的任務をわが同盟を先頭とする革命の左翼が、10、21以降の兵力とのはけしい緊張関係の中で担っていることである。

このように日米階級斗争の真只中にある、わが同盟は70年安保斗争の路線を確定し、路線上下は日本階級斗争に優位を誇ってきたが、与や、67年政変に直面し、従来に数倍する組織力、革命党派としての政治組織上の指導能力と長期の斗争に耐えて局面を突破しうる持続性をもった組織力が要請されているのである。

(3)昨年の10、8が切り開いた局面と、そこでの兵力との攻防の性格とは何であつたのだろうか。われわれが七回大風を打ち倒して来たが、10、8から88、21への局面における地形成および階級形成と、10、21以降の局面が同盟に要請する地形成とはいかに異なるのかを問うたのであろうか。

地形成—階級形成の側面から10、8を切開するならば、日韓から砂川に至る前紅地帯に社学同の大衆運動形態に史的な転換を問うたのである。60年安保で崩壊したフロントは65年日韓斗争を契機に再建が着手され始めたが、同盟の性格は、基本的には統一戦線党としての統一委員会方式をとり、社学同の大衆運動の拡大形成、いわゆる階級形成を先行させつつ、大衆運動の発展段階に応じて地形成が併行していった。マル戦派との統一もこの基本路線の延長上に位置づけられたが、岩田行りに体系化した敵艦技術論と特殊地方家族的性格の制約性をもっていったといえ、中央幹部を密集させていたマル戦派の他に、統一委員会方式の南東は検証された。ここから大衆運動の階級形成の段階を越えた上からの地帯独自の形成が三マロックの日米階級斗争をスロレタリアア日米主義にもとづく組織された暴力革命を担うことを任務として目的意識的に要求されはじめた。わが同盟

がかかる状況にあった段階で10、8斗争は迎えられた。われわれのこの意識性は、党派が戦術的保証までを貫徹し抜かぬは、大衆斗争一般としては突出しえぬ10、8斗争を斗い抜き、続く11、12斗争をも中核派を尻目に突出して貫徹したのである。

岩田以降の局面で問われたいものは、組織された政治同盟の活動家の実力斗争と大衆斗争との断絶、その断絶を埋めるべき大衆的実力斗争の問題であった。階級形成が直接的に地形成を問う階級斗争の段階に突入したのである。階級先論のこの攻防におけるわれわれの突出は、エンアラ、王子、成田、新體への拡大し、この政治関係の中で中大斗争が問われた。中大斗争を軸材として学生層の未分化状態が崩れ、分解し、ヘルメ、ゲバ棒は、里日学園斗争に波及し世相を形成するに至った。このように大衆斗争を大衆的実力斗争へ発展させる矛盾の過程で、中核派は「党のための斗争」と称して三派から分離し、セクタ化した一党派の斗争とした。

わが同盟の社学同も戦術次元のスローガンを大衆斗争の戦術スローガンとしてかかげ、党派性を前面に押し出した単独斗争を打ちやるをえりかつたのである。この矛盾した政治組織指導上の問題は、10、85日、12斗争が切り開いた兵力との攻防と、未分化学生大衆が分解して、あらたな自然発生性がヘルメとゲバ棒で日共民青をのりこえて登り上るに至る階級の階級斗争の性格に制約されていた。この限界性の中で、わが同盟は地形成の処理を階級形成の処理に持ち込む展開した形態を、四中委で決争された党の目的意識性の大衆の自然発生性への敵対の克服だとか、党の目的意識性が逆に大衆が自然発生性への期待へ拜罷し、同盟が大衆政治組織化し、逆に大衆政治組織自体が幹体化したために、更に一段深部の大衆をとらえられず、革マル、解放青年二戦線転争界子の確立を許すことになったという状況は、大きくは昨年の10、8から今年の10、21に至る先端の階級攻防と終体の階級関係に規制されたものとしてとらえておく必要があるだろう。だが我が同盟は、問題を主体的にとらえ返して自己絶背の問題として受けとめるべきである。

(四) 1021をめぐる日本階級斗争の攻防は、昨108斗争以降分
解し別進した革命的諸党派を連進攻撃の統一行動へと呼び出
した。しかし今度は、砂川の三つのうねりが形成した未分化
な党派と鮮明の大衆の質をばらかじ上まわる、党派的に鋭え
ぬかれた大衆的政治同盟活動家と大衆的実力斗争次元の混在
して全同的規模で参加した。1021日の攻防は日本の政治権
力が総結集した治安暴力装置をスターズタに分断し、各所で粉
砕した。しかし権力の騒乱罪適用をも、とする組織破壊弾圧
は108をばらかじ上まわるものとなり、再び112の質をもつ
た117を形成しえなかつた。

117を昨112の質をもつて反撃するには、同盟の党形
取と組織力が昨112のそれを教悟するものが必須であつた。
69年階級斗争の性格は情勢一般の必要、及び権力の攻撃ス
タジェールからかくしつうバキであるという位置づけ一般では
ないぬけない義しいものとしてある。69年階級斗争は一つの
斗争そのものが同盟の組織の存在を問うような性格としてあ
る。従つて「べきであるから斗争」ということは斗争そのものが
ないぬけない、組織力にとつて無自覚なままは斗争に突、ため
は同盟そのものの存在が問われくる段階に入、たつて正確
に認すべきである。

このことは冒頭に述べたとおり、1021のわれわれの勝利の
前進が権力の反革命的エスカレーターをひき出し、激しい緊張
関係をつくり出したことを意味し、この緊張関係を突破する
には、何よりも同盟の刷新党への組織強化と、大衆的政治同盟
盟としての青年同盟および社会同の独自の強化が必要となる。
もしわれわれが108、1021の一年間の斗争が突つつけた課題
を総括するに十分な大衆的政治同盟を形成すれば、同盟は党
として必ずからを分離するに十分な大衆的政治同盟の中に融
没するが、大衆的政治同盟「党」そのものを要求し、大衆的政
治同盟そのものが柔軟な大衆性をもたぬ確直したものに
なるべきである。

同盟が現代的に固われている。ロレタリア刷新党へ依拠
するためにかちとるべき質とは何か。その質の現実とは何か。
そのオ一の基準は、プロレタリア階級主義に奠かれた世界
革命と「実体的に」担いうる文字どおり刷新党への依拠であ
る。即ちまたるべき階級階級性機にたして再編しつつある
階級主義諸列強の権力と、世界政策の全面的転換に対決して
高揚を開始しながらもスターリンニスト党の階級階級性とい、
各同の革命的諸派の二同的階級性をも、た指導を受けてバラ
バラに進退する階級階級斗争を、明確な世界革命綱領で統一
的に指導し、階級階級主義に戦略的指導と与え、実体的

な階級階級性と構築し得る階級階級性への依拠である。能
この任務を果し得る同盟指導部の理論的指導、組織指導
上の階級階級強化が要請されている。

そして特に重要なことは、現代過渡期世界、就中現代帝
国主義の危機の性格と形態が規定する政治危機は、一同的
政治の決着としてほとんまり得ず、階級階級性機、階級
的党内へと転化する可能性を大きくしていることである。
従つて我々は、目前の侵略、抑圧、反革命に対決する政治
先行的斗争を、中央権力斗争を主軸に大衆的実力斗争とし
ての社会的陣地を広範に構築して、全プロレタリアートを
導引しつつ、70年代権力奪取と世界階級戦争の勝利の中に
展望し、武装蜂起を担い得る政治組織とし、政治理論、組
織指導規律、生産主義思想、組織的物質的力量とまず自
築しなければならぬ。

オ一の基準は、オ一基準を要請する党的任務と同盟が果
すためには、大衆の自然発生性の諸段階に党が追随するこ
となく、これを目的意識性の萌芽として受けとめ、同盟の
目的意識性へと高め、階級形成の自然成長性で克服するこ
とは知論のことにあるが、同盟は党形成にむける自然成長
の克服を独自の党的任務の領域として設定しなければなら
ない。

党が階級斗争の中で不断に行なつた党形成の強化は、それ
自体が党に党として、目的意識的な党形成のための斗争、
即ち党の目的の斗争を要請している。
戦略的的の党は大衆斗争指導部としての党ではなく、党
の戦略的的という場合の「党」の意味も、党独自の目的意
識的な党形成、党のための斗争なくしては空語になる。
世界革命と日本。プロレタリアートに責任をもつ党となる
こと、即ちプロレタリアートの刷新党とは、プロレタリア
ートに対し、方針上・組織上、革命的責任を果し得る党と
なることである。
この課題を果す重要な任務がスターリン主義との斗争で
ある。

我々は先述の総括にたて、一同の革命党が権力斗争にア
るローチする方法論を確定するために階級階級性論を論じた
際、一政治党派は①世界的経済危機の反映として流動す
る階級階級性諸階級の経済的利益と「スターリン」を代表す
るが、階級の物的利益と「スターリン」には代弁せず②その党
派自体が、階級階級性の世界経済支配と政治支配との上
つに主体的に把握しているかといふことを媒介にして階級
斗争に固わる③従つてプロレタリアートの経済的的政治的利

益と政治的責任を果し得る党と
なることである。
この課題を果す重要な任務がスターリン主義との斗争で
ある。

言を代表する党派も例外ではなく、特に、ロシア革命の成功とコミンテルンの成立後（過渡期世界）の各国共産党は、帝国主義の世界政治支配に闘争する把握と国内階級闘争の方針に至るまでコミンテルンから規制され、就中スターリンのコミンテルンの指導は各国共産党の革命闘争に対し決定的な性格となつた。ことにふれた。

我々がスターリニスト党と分離して同盟を形成し、前江党たらんとして党形を追求するのは、大衆運動の計上の対立戦略上の対立が非和解的なものとして存在し、この戦略的対立元における党派闘争をめぐりしては革命運動が破壊されるからではあるが、しかし、スターリン主義との計は、戦略的戦術的次元を越えて革命綱領的内容（正義の綱領は戦略とも含む）にまで高められなければならないのである。

（一）のことは、スターリン主義との計は、国内的諸党派と国際主義の下に結果し、新なる五インターの創設をめざすこととする党派にと、不可解的課題である。ことを物語、している。このことは過渡期世界の現段階における党形成の内実である。過渡期世界の階級闘争は帝国主義に對する戦略上の闘争にとまり、中口文革、チエコ問題等を不断に同じ大衆を明確な回答を要求する。その要求は戦次を越えた世界観まで含む内容を持つてゐる。またキョーバに對するソ連中口の政治対応の深部にむき中ソ共産党の革命綱に對する評価までめりわかれ回答しつゝさなければ、すなわち、マルクス主義が今日的に向ひてゐる共産主義世界観の全領域にまで答えをいなくては、先進的活動家集団としての政治問題から分離離れさせた党を党として形成することはできなうであらう。

党形成における目的意識性は、決して「資本論」以前にマルクス主義を低めて初期マルクスにかえり、アロレタリア人向の説理を勉強して主体的除外論で反スターリン主義を形成することはできなう。

あくまでも現段階の階級的任務に責任をこたへ政治綱領指導上の実践的課題に答へる問題として、マルクス主義が今日の向ひに對する課題を共産主義の世界観次元にまで高め、そのなかをめぐりつゝである。そのために向ひは、基準となるべき綱領を撰ぶとすなはねばならぬのである。

この党形成の目的意識的闘争を貫徹する実践的綱領として、同盟中央は八回大会に「綱領委員会」の設置を提案し、この要請に大胆に答へてくれた。

党形成の問題、すなわち党がアロレタリアートに革命的責任を果す党へと発展するところの問題を、党員が体内の労働者救済的計に計つてつとめる思考は誤りである。この問題は階級分類的存在としてのみ説かれてはならない。労働者の救済が継続的に増加することなく、たゞちに党がアロレタリアートの階級の階級意識性をこまことにせなうないことは自明であらう。同盟が党として、アロレタリアートの階級に責任をこたへて革命を担う党たらんとすれば必然的に、取手を打ちこまれた党本部と地区党は村園の下に、戦略的大業地帯に換表に換表工場細胞が打ちこられることである。量はおくまで質の形態化のバロメーターとして把握すべきである。

取手地区党の建設に続く換表工場細胞の階級的拡大の任務は、正に、同盟が世界革命を七〇年代に展望するアロレタリアートの前社会党へと質的に発展する段階における一つの発展的組織形態である。取手党本部の下に工場細胞を、不拔の工場細胞を指導しつゝ取手党本部を、同じく、同盟が現段階を要請としてゐる実践的階級である。

赤三の基準は、同盟の党的発展を必呼として可能とする情勢がわが同盟の前に現実に展開されてゐるものとある。選挙闘争に埋没してゐた社共は、わが同盟を先頭とする革命的左翼が、砂山に成田に農民の結合を求め、全国的基地闘争と愛国闘争の波をまくらびつゝ、労働者階級の支持に共感を惹きと獲得し、組織を拡大し、社共の基礎たるソマル中回反を分解させ、反帝民主主義の市民と反暴力の反動的市民を離れさせたことにおびえ遂に對立を始めた。彼らの恐怖は、21でその極に達し、皆非発言をめぐる社会党の分化が始まり、日共のトロツキスト武装解除作戦が提議された。社会党単独政権を志向する組織は反日共の立場からトロツキストに積極的にならず、社共政権をめぐりつゝ共産主義を志向する協会はトロツキストと排除を民権の力を借りて実現しようとしてゐる。これを受けて中回反右派の波にのつて登場した日共はトロツキスト解除作戦を提議した。日共の路線は東大川・22闘争であきつたにわたつた。

社会党は左右に三分に分解し、上下の分解を加えて四分に分解してつゝある。多説社長の枠内の分解ではあるが、右は鉄錫官田等右派系グループの反知事選挙委員をへ

の参加拒否と総評の七〇年カンパニア拒否である。民社同盟との統一戦線を志向している。左のは協会両派で、社共連立政権幻想、社共スリッジによる選挙斗争でトロツキストを徹底的に排除する反トロ人戦線グループ。

中間左派としての相改左派は、みすからる理論が依拠する階級と階級の左傾化および反日共思想から社会党単独政権とトロツキスト排除の非構造化である。反安保実行委員の日共との共闘拒否は、この中間から打ち出され、われわれの対応に時間を与える補助要因である。

更に、この社会党幹部の横への分断に対し、「非武装中立安保」をおろせと主張する下部党員が登場したことがある。社民の枠内とはいえず、この下部の主張は、われわれの闘いがつくり出した労働者階級内の意識の地殻変動の反映である。

これらの事態は、われわれの10・21が権力の反革命強化と共に呼び出した階級の階級関係の党派的表現である。

六九年政府は、われわれと権力との直接的攻防が基軸となりながら、諸階級諸階級の意識分断が一段進んだ段階で日共をばじめとする人民戦線派と、中間右派と右翼が、われわれの階級先端の攻防に敵対してくる予想される。更に公明党の街頭学園、組合退出を佐世保における環境を静観にととまると楽観視できぬようた。

権力の暴力との直接的対決の連続的攻防が大衆意識を分断させ、自然発生的大衆的暴力斗争の波を形成した六八年の段階から、六九年は明らかに小ブル中間右の右派が登場し、更に日共共青が社会党の協会派を利用してフランスおよびスペインの人民戦線のように六七年安保斗争の高揚を社会斗争の枠に押し込めそうとしてくるであろう。

権力斗争は瞬間的一変突破全面展開のくりかえしの上には勝利を展望しえぬ、立体的複効的なものとなる。東大斗争はその縮図である。その状況に耐えて突破しうるものこそが、組織的に勝利する党派力と組織力である。この持続性・恒常的組織活動を保証しうる戦斗性こそがプロレタリアートの戦斗性である。

わが同盟は、カー・二の規準を内実とする党独自の党形成を追求し、同盟を密としてうち固め、取革党核内と不抜の工場細胞を基軸に、広範な戦斗的活細胞を結集しなければならぬ。そのためには相対的に分離させた大衆戦斗活動家集団としての政治同

盟、共産主義青年同盟を構成する必要に迫られて

いる。学生細胞の任務が社会同の指導的化することではないのと同様に、労働者細胞は共産主義青年同盟の指導部として自己を解消したり、共産主義青年同盟に党の任ムを代行させて大衆的戦斗集団としての労働者の政治同盟の性格をばめ歪曲してはならぬ。

党が党として形成される実践的帰結は、共産主義青年同盟の建設過程を通じて、細胞、地区党の基本党組織がいかに自己を相対的に分離し党的任ムを果すかにかかっている。われわれは、労働者への政治的持込込みの問題において、外から反戦を待ち込み、街頭化の量的拡大として、量的行ってきた。このことは勿論、重要な実践的帰結ではあるが、われわれは更に、工場、職場における細胞が、諸実践の問題を、一々二の基準即ち細胞次元の次の課題から労働者にさやめて判りやすく具体的に答えき、てゆく細胞細胞の諸活動を行わねばならぬ。

党的活動基準の明確化は大衆的政治同盟からの目的意識的な相対的分離の過程を通して組織的に勝ちとられてゆくべきである。

以上が、現段階における階級形成、党形成と同盟の位置に関する結案である。

トクニ